

第53回日本伝統工芸近畿展

鑑査・審査講評

第53回日本伝統工芸近畿展の応募作品総238点から厳正なる第一次鑑査、第二次鑑査を経て201点が入選し、その中から審査を経て13点の受賞作品を選定しました。鑑査・審査に携わられた7名の作家・学識者の皆様からの講評を公開いたします。是非ご参考の上、入選・受賞作品をご鑑賞下さい。

【第一次鑑査】全ての応募作品を二部門に分けて入選に相応しい作品を選定する

【第二次鑑査】第一次鑑査で選定された全作品を再度検証し入選作品を決定する

【 審 査 】入選作品の中から授賞に値する作品を選定する

第一部門(陶芸・金工・木竹工)

鑑査委員 しまざき けい こ 島崎 慶子 菊池寛実記念 智美術館 主任学芸員

陶芸、木竹工、金工の鑑査を通し、木工芸の刳物と竹工芸に特に意欲的な作品が出品されていた印象がある。

刳物は技法の性質上、指物や挽物と比べて造形に自由度があるが、それを積極的に生かそうとする姿勢が出品作から窺えた。優秀賞を受賞した甲斐幸太郎の作品には、そのような挑戦を説得力のある制作にするために必要な、素材の吟味や技術力、そして全体を統合する明快な意思が示され、受賞に適っていたといえる。

一方、竹工芸の活気を作っていたのは四代田辺竹雲齋の弟子たちの作品であろう。技術的な段階は様々ではあるものの、自分なりの制作を模索する姿が窺えるものもあった。その中から優秀賞に選出した作品は、二代竹雲齋が考案した透かし編による籠で、竹雲齋の技術と美意識の継承による完成度の高さが際立った。しかし、本来、工芸作家に求められているのは、思考や感性と技術が結晶した独自性のある制作であると考えられる。その点は今後に期待したいところであり、また、そのような作品で対抗できるものが無かったことは、他の出品者にとっても今後の課題であろう。いずれにしても工房制が後進の育成に成果を上げている点は朗報である。

また陶芸では焼締め陶に若い感性が光り、優秀賞を受賞した。公募展では存在感を示し難いようにも見える焼締め作品であるが、その状況を打開する大胆な制作を展開させてほしい。

昨年と今年と二回続けて鑑査をさせていただき、大きな変化を感じたのは陶芸における入選率である。鑑査時に伝えられた入選数の目安が前回よりも少なく、それに準じた結果、前回85%であった入選率は77%へと変化した。これは、ほとんどの作品が入選する公募展ではなく、選ばれた作品を展示する場へ戻そうという、運営における意志と受け取れる。例えば15年前と比べると陶芸の出品数は半数近くまで減少しているが入選数にはそれに伴うほどの変化がない。当時は50%台であった入選率が上がり続け、つまりは

入選の水準が下がり続けているのが現状である。良質な展覧会を行うためには、実力のある作品を鑑査対象の中に増やしていくこと、また、実力者たちが意識的に出品すること、安定的ないつもの制作ではなく、挑戦的な力作を出品する場にしていくことが必要ではないかと思うが、それを入選率の高いままで実現することは難しいであろう。

作品発表の方法が多様化し、日本人が減っていく時代に、国内を対象にした公募展の出品数が減少するのは自然なことである。時代に合わせた変化と改革が求められるが、その試行錯誤は出品数のある部門が出品数のあるうちに行う以外にないと考えれば、陶芸部門の姿勢は支部にとっても日本工芸会にとっても意義があるのではないか。

鑑査委員 とくとめ だいすけ 徳留 大輔 出光美術館 学芸課長

近畿支部の鑑査は二回目となります。今回は第一部門の第一次鑑査を担当させていただきました。私は公募展の審査では、制作における技術はもちろんのこと、なぜこのフォルムなのか、文様(デザイン)との関係がフィットしているか、そして品格をそなえながらも見てあるいは使う楽しさがあるか、そして挑戦的な試みを感じられるかを考えながら作品を見るようにしています。

第一部門全体を通しての感想ですが、造形性や技術的にとくに優れた作品とそれ以外の作品のギャップが少し大きい、またちょっと守りに入っている作品が多いのかなという印象を受けました。とくに申し込み数が多いのと普段私自身が主に研究の対象としている陶芸の分野に関してはそれが顕著だったように思います。よく言えば安心して見ることができた一方で、挑戦的なあるいはちょっとやり過ぎ感があるような思い切った作品が少なかったというのが率直な思いです。木竹工や金工は意欲的で繊細ながらもシャープで力強い質感の作品が多く見られたと思います。ただ例えば木竹工では、表面の色や艶のだし方、あるいは一見すると見えない部分の編み込みが甘い作品も見られました。そこはおそらく技術的な習熟度の要因があるのかもしれませんが、ぜひ入賞作品をじっくり見てみたり、会員同士でコミュニケーションを交わしそれを参考にしながら(別に他者の意見を聞き入れるという意味ではありません)、作品作りにおける完成度を上げていただければと思います。また毎回毎回はできないのかもしれませんが、2～3回に一度はより挑戦的・実験的な取り組みの作品でトライするといったこともありなのではないかなと、今回一次鑑査を通じてそのように思った次第です。ぜひもっともっと近畿支部あるいは工芸会全体が盛り上がっていくことを期待しています。

鑑査委員 かわもと たかし 川本 隆史 大阪伝統工芸品産業振興協議会 事務局長

歴史ある日本伝統工芸近畿展の第一次鑑査の委嘱を受け、多くの作品を見る機会を得ました。応募作品を拝見しますと、従来からある表現様式の作品、それを発展させた新しい感性の作品など、目を見張る作品ばかりで驚きました。作品は、作り手の思い、こだわり、感性の結晶であり、完成までかなりの手間をかけられています。鑑査される皆さんは、伝統工芸品に関わる方ばかりなので、作り手の努力、気持ちは十分理解されており、作品名と完成度を慎重且つ丁寧にご覧になって鑑査されていたことが印象に残りました。

完成度の高い作品は、いつまでも心に残り、細部にわたって丁寧な仕上がりでした。また、渋さの中に輝きがあるものや新しい発想や感覚の作品も印象に残りました。改めて、不易と流行という言葉の大切さが今回の鑑査会で実感できました。

第二部門(染織・漆芸・人形・諸工芸)

鑑審査委員 からさわ まさひろ 唐澤 昌宏 国立工芸館 館長

近畿支部が開催する支部展の鑑査に二部門制が導入されて10年ほどが経った。導入されて間もない頃に鑑査に携わり、分野を統合した鑑査のメリットに、今後の発展を期待した。今回はしばらくぶりの鑑査となったが、やや異なった印象を持った。

分野を統合したメリットは、作家から選ばれた鑑査委員が、専門以外の他分野の作品も鑑査するところにある。専門分野だけを見る鑑査と違い、他分野からの視線と感覚が、より客観的な判断と価値観を見出すことになるだろうと期待感を持ったのだ。

しかし、今回の鑑査では、その期待感ではなく、他分野に対して鑑査する目の甘さを少なからず感じた。そこには、以前にも増して「支部展だから」という姿勢が存在するように思った。

染織は、染めの作家と織りの作家がバランス良く活躍しているように見受けられた。また、技術不足を感じさせつつも若手の意欲的な試みも認められ、今後の発展を楽しみに感じた。その中で数点、落ち着いた見られるものの、もっとチャレンジをして欲しいと思う作品があった。近畿支部のような技術レベルの高い染織分野で生き残る手段として「落ち着き」を選択したのであれば、それは違うであろう。実のところ、年齢に関係なく「若さ」はあるはずであり、それをどのように考えるかが重要となる。鑑査側としては、既成の考え方を打ち破るチャレンジを期待したいのだ。

漆芸は、仕上げの甘さがとくに目立った。形や装飾につくり手のセンスを感じても、最後までやりきっていない残念な仕事が多数あり気になった。観る側というよりも、つくる側に「支部展だから」という甘えがあるように見えてしまった。

人形は、つくり手の意識の高低が、とくに作品の良し悪しを大きく左右する。習い事からもう一段も二段も、ステップアップする気持ちが必要だ。制作する際に、全体のバランスよりも、顔や手などの細かなところに目がいってしまっている作品が少なくない。それでありながら、細部のつくり込みもできていない。つくり手の数が減少傾向にある中、勉強する機会も少なくなっているだろうが、意識改革に期待したい。

諸工芸は、技術力の不足が作品のクオリティを大きく下げているように思われた。コロナ禍で技術交流がうまくできていない歯がゆさも影響しているのだろう。以前にも伝えたと思うが、近畿支部の中だけで考えずに、他の支部展や部会展、秋の本展をリサーチして、自身の技術レベルを把握し、より技の修練を心がけよう。

「支部展だから」という言葉は、若手を育てたり、新たな試みを見出したりするなど、使い方によっては有効な手段となる。近畿支部は支部としてのさまざまな試みも行われている。今後も、前向きな姿勢を期待したい。

鑑査委員 つちや よしのり 土屋 順紀 重要無形文化財「紋紗」保持者

日本伝統工芸近畿展は、ある種の憧れを持って拝見しておりました。この度、染織・漆芸・人形・諸工芸の第一次鑑査を務めさせていただきまして、日本工芸会においての7部会全てが揃い応募点数の多さと質の高さは、さすがと思いましたが、全体に大人しく行儀の良さを感じつつも胸に響く作品がなかったのが第一印象でした。染織は、土地柄か出品数も多いので意気揚々としっかりとした鑑査が出来ましたが、漆芸・人形については、絶対数が少ないため正常な鑑査が出来るか不安でした。今のうちに将来に向けた何らかの対策が必要であると思いました。

自分の作風と思っている、他者からすれば垂流・繰返しと映ることがあります。今回も散見されました。作品は創るだけでなく見る目を養うことも必要です。しっかりと自分の目で自分自身の作品を確認

してください。

支部展の役割は何でしょうか。今支部展の意義が問われています。多くの人に興味を持ってもらい出品していただく日本工芸会の裾野を広げることも大切ですが、支部展を本展・部会展の次の3番目の公募展と捉えるのではなく、新しい挑戦や実験をして評価を問う場と考え、時代を意識した魅力ある作品を出品していただきたく思います。

鑑査終了後に初出品の方や若い方の出品が多いと伺いまして、とても嬉しく思いました。これからの日本工芸会を支える方々です。大いに期待しております。

鑑査委員 なかやま まい こ 中山 摩衣子 京都市京セラ美術館 学芸員

この度、日本伝統工芸近畿展の第一次鑑査を初めて担当させていただきました。第二部門は、染織・漆芸・人形・諸工芸で構成され、染織が一番出品数が多く、漆芸、人形、諸工芸については少しさみしく感じました。一点一点をじっくり拝見し、点数をつけて、点数順に並び替え、入選作や賞候補作を選定しました。洗練されたデザインとそれを実現する堅実な技が随所にみられる安定した作品から、技術は拙いながらも今後の飛躍を感じさせる意欲作までさまざまでした。レベルが高く、拮抗していて判断が難しい場面もありましたし、仕上げに甘さが残る作品も少ないながら見受けられ、鑑査に臨む作り手たちの姿勢の差も感じられました。

コロナ禍にあったここ数年、作り手たちの繋がりが以前より希薄になってしまったことは想像に難しくありません。工芸の世界に限らず、どの分野や世界でも同様の変化は起こりました。若い作家たちの育成については少し停滞してしまった感があるのかもしれませんが。制作は孤独な作業ですが、やはり横や縦の繋がりによって発展していく部分も大きいと思います。ベテランも若手も切磋琢磨して、工芸界全体を盛り立てていってくださることを期待しています。

鑑査委員 ささおか りゅう ぼ 笹岡 隆甫 華道「未生流笹岡」家元

染めや織りの技法を駆使した色彩豊かな作品、仕上げの美しい赤や黒の漆芸、繊細な截金にこだわりの硝子作品、表情豊かな人形たち、……。作品には力がある。しっかりした技術に裏打ちされた丁寧な手仕事にじっくり向き合うと、その作品に向き合う作家の息づかいまで聞こえてくるようだ。

ものづくりに携わる者にとって、伝統と革新、古典と現代は、永遠の課題だ。先人が編み出した優れた技や想いを受け取り、時代に求められているものを創作する。言葉では簡単だが、実際の苦労は並大抵ではないだろう。それは、我々、文化の世界でも同じだ。日本のいけばなは、西洋のフラワーアレンジメントとは発想が異なる。最高の瞬間を演出するため満開の花を敷き詰めるのがアレンジメント。これに対し、いけばなでは「蕾がちにいけよ」と教わる。蕾のまわりには余白を作り、花の命の移ろいを最後まで見届ける。いけばなが表現するのは時間経過だ。太陽の方に向いて伸びていく草木と向き合い、逆境にあってこそ向上心を持って生きていかなければならない、と学ぶわけだ。

もちろん、これらはどちらが優れているといったものではない。たった一輪の蕾に向き合ういけばなの表現が好まれる場合もあれば、アレンジメントが表現する圧倒的な花の魅力が好まれるシチュエーションもある。私はいけばなの家元だから、アレンジメントの表現を使うことには抵抗があるが、皆さまの作品を拝見して、私自身、もっと自由にジャンルを超えてもよいのではないかと思直した。

ものづくりの歴史は、挑戦の歴史だ。これからも貪欲に新たな表現を求め続けていただきたい。ジャンルを超えた展開にも期待している。



公益社団法人

日本工芸会近畿支部

TEL.075-252-5205 <https://nihonkogeikaikinki.jp/>